

「からだもいじめるも支える リフト」を発信したい



ヤマシタ神戸営業所に勤務する廣田有香さんは、新卒で同社に入社して今年5年目の福祉用具専門相談員だ。今回の研究大会では、廣田さんが3年目に担当したリフト導入の事例を発表する。

特養に入所だった利用者Aさん（80代女性）は、レビー小体型認知症で要介護5の重度者だったが、家族の強い希望もあり、退所して在宅へ戻ることとなった。「特にスリングシートは色々な製品を試しました」と廣田さんは振り返る。Aさんは言葉での意思疎通が困難。表情や動きから、痛みや不快さを感じていないか観察した。皮膚もあまり強くなく、通気性が良くなかったり、シートの縁が少し硬

かったりするとか、発赤ができてしまう。その都度、廣田さんのもっとAさんが快適に移乗できるスリングシートがないかを調べ、メーカーに問合せた。退所前後の3カ月をかけたかいかあって、メッシュ地で布も柔らかく、Aさんにより適したシートにたどりの着くことができた。家族へリフト操作を指導する際は、安全に使うための方法は当然伝えるが、「難しいぞ」「無理かも」と思われないように平易な説明を心掛けました」という。

このAさんのケースを発表演題にした理由を尋ねると、リフトへの強い思い入れを話してくれた。「当社はノーリフトティンクポリシーを掲げているので、研修などでその理念に元々共感していました。またAさんも含めて、リフトを導入した担当ケースで、ご本人とご家族の双方に負担が軽減されて、ゆとりや余裕が生まれる場面を実際に見てきたため、在宅でのリフト活用がもっと進んでほしいと

さらに強く思うようになりまし
た。ご本人も『抱え上げさせて
悪いな』といった負い目をいつ
も感じてしまうのは辛いですよ
ね。現場で実感したリフトの
有用性を発信したい思いから、
演題は「からだもいじめるも支え
る、リフトのある暮らし」に決
めた。

廣田さんは、今回の大会テ
マでもある「根拠に基づいた福
祉用具の活用」に触れ、「今後
は団塊の世代で介護を必要とす
る方が増えていきます。価値観
はますます多様化し、身の回り
のことにこだわりの持つ方も
多いでしょうし、パソコンやス
マホを使って自分で福祉用具の
情報を集めることもできます。
それを踏まえると、今以上に選
定の根拠や説明能力が問われる
ことになると思います。そうし
た人にも、しっかりと納得感を
持って福祉用具を選んでもらえ
るように支援できる福祉用具専
門相談員を目指していきたいで
す」